



長岡技術科学大
大学院教授

齋藤秀俊氏に聞く

開放へ大人が工夫を

今夏の福井市の小学校プール開放事業の運営について、水難学会会長で長岡技術科学

大学院教授の齋藤秀俊さんに聞いた。

「開放基準を設けて中止が相次いだ。どう見るか。」

「プールで遊びたいと思う子どもたちがいけば基本的には開放すべきだ。主役はあくまで子どもたち。大人には開

放できるように工夫することが求められる」

「市は開放の基準として、予想最高気温と「暑さ指数」の二つを設けた。

「二つの基準には根拠がない。なぜなら陸上の運動と水

中の運動の熱中症対策は一線を画すからだ。今年3月に日本スポーツ振興センターが発行した『学校屋外プールにおける熱中症対策』には、中性

水温(水中で安静状態の人の体温が上がりも下がりもしない水温＝33～34度)以下であれば陸上での運動と比べて体温が上がりにくいという記述があり、中性水温が一つの基準となるのではないか」

「市は監視員を雇わず、保護者同伴のみプールの利用を認めるとしたが。」

「子どもとプールに行くのはすごくいいこと。ただ、保護者がプールサイドで監視するのは熱中症になる可能性がある。保護者が子どもと一緒にプールに入り、寄り添いながら監視するのが理想。こうした取り組みは全国的に見ても少なく、実現すれば模範になる」

中性水温一つの基準

(聞き手・菅野)